

論文の要旨

ふりがな 氏名	ようりゅう 楊柳
論文題目	アングリマーラ伝承の東漸 —仏教思想の変遷と説話の展開—
<p>論文の要旨</p> <p>釈迦の在世中（紀元前5世紀頃）、古代インドのコーサラ国（Kosala、憍薩羅国）のシュラーヴァステイー（Śrāvastī、舎衛城）という町にアングリマーラ（Aṅgulimāla、央掘魔羅・指鬘など）と呼ばれる人物がいたという伝承がある。彼は99人か999人を殺害し、それぞれの被害者から1本の指を切り取って、頭や首に飾りつけた。100人か1000人に達するのに1人足りない時、アングリマーラは釈迦に出会った。釈迦の説諭の下、アングリマーラは改悛し、仏教に帰依し、後に阿羅漢までになって、尊敬を受けた。これがアングリマーラ伝承である。この伝承最初は単に仏伝、すなわち仏教の開祖である仏陀釈迦の生涯を宣揚するものとして登場したのである。凶悪な行いを犯した者が、釈迦のいくつかの教えによって、悪から善への転換を遂げることができるという物語は、仏弟子たちが、釈迦が危険を恐れず、広大な神通力を持つ仏教の創始者としての個人的魅力を表現する手段の一つとなっている。然しながら、仏教思想の発展とその影響力の拡大とともに、仏教経典に記録されているアングリマーラ伝承は、増広と変容を続け、釈迦の個人的魅力以外の考察を引き出した。それは、悪事を働いた後の悔い改めが、過去の悪事を無効にできるかどうか、極悪非道であっても、仏教に帰依することで良い報いを実現できるかなどの倫理的問題を提起するのである。</p> <p>本研究は、アングリマーラ伝承を中心として、仏教思想の発展過程における変遷、及び仏教物語の説話的展開を明らかにすることを目的とする。パーリ語経典に基づく日本語訳本、漢訳経典、漢訳経典目録、中央アジアのガンダーラ仏教美術及び西域石窟の仏教美術などの資料、歴史書も利用し分析することで、時代背景を踏まえて総合的に仏教思想の変遷と説話の展開を把握する。</p> <p>まずは、インドから中国に至る地域を中心に、現存するアングリマーラ伝承に関連する文献資料と画像資料を列挙し、簡単に整理して、アングリマーラ伝承の全体像を明示した。そして、仏教思想の変遷をより反映しやすい仏教経典を手がかりに、仏教の発展段階である原始仏教、部派仏教、大乘仏教の三つの主要段階にわたって、アングリマーラ伝承に関連する経典を分類し、議論した。原始仏教段階の経典（二点のパーリ語経典と三点の漢訳阿含経）は、釈迦及び仏教の偉大さを強調し、業因果の必然性を強調している。部派仏教段階の経典は、原始仏教段階の関連経典と比べて内容の詳細が豊富で、新たな発展、すなわち本生物語の挿入が見られる。この段階の業因果の議論はさらに深まり、業因果の必然性だけでなく、その継続性や時間性についても論じられている。大乘仏教段階に至ると、アングリマーラ伝承は如来蔵思想を説明するための独立した経典（『央掘魔羅経』）として利用され、『央掘魔羅経』ではアングリマーラ伝承の記述の後に、多くの幅を割いてアングリマーラと各菩薩や仙人との対話を通じて如来蔵、すな</p>	

わち「一切衆生に悉く仏性有り」（一切衆生、悉有仏性）を説明し、さらには「一闡提などもみな仏性がある」（一闡提等悉有仏性）という新しい思想も肯定し発展させている。続いて、説話の展開をより反映しやすい仏教芸術を手がかりにして、アングリマーラ伝承に関連する画像資料を詳細に解説した。経典の伝播と同様に、中央アジアのガンダーラから中国の西域に至るアングリマーラ伝承の画像表現も変化した。これらの変化の中には、アングリマーラ伝承と燃灯仏授記の場面が混合された例があり、アングリマーラが釈迦に懺悔し、未来に阿羅漢となる場面と、燃灯仏が過去世の釈迦に未来に釈迦となることを告げる場面が重なっている。この表現から仏教思想の重要な変化を窺うことができるかもしれないが、表現が曖昧で使用例が少ないため、本研究では言及に留め、仏教思想の変遷の説明には用いていない。また、アングリマーラ伝承の画像表現における重要な変化を明らかにし、中央アジアから中国にかけて、アングリマーラ伝承の画像の位置が正面から天井に移動し、画像の性質が仏伝図から因縁図に変わったことを示した。最後は、アングリマーラ伝承の口頭伝承（説話）の展開について説明した。本研究の構成が経典から始まるため、先に『六度集経』と『賢愚経』の二点の特殊な経典の内容と成立問題を手がかりにし、その後、前文で明らかにした画像変化について探讨了。『六度集経』と『賢愚経』の二点の経典の成立は文字記録の原典に基づいておらず、口頭伝承に基づいているのである。この二点の経典の成立時には地域的に遠く、時間的にも約200年の隔たりがあるが、それでもアングリマーラ伝承の筋書き、全体構造、内容の増補には高い類似性が見られ、アングリマーラ伝承が説話での様子が分かる。前文で述べたアングリマーラ伝承の画像表現の変化も、仏教物語が口頭伝承としてどのように展開されたかを示している。かつては釈迦の生涯を宣伝するために用いられていた仏伝図が、石窟の天井の狭い菱形図形の画像に移り、アングリマーラ伝承の画像の役割が、仏教徒の礼拝用から口頭伝承の際の視覚的補助へと変化したことが分かる。語り手が石窟で法を説く際、頭上の菱形図形の画像を見ながら解説し、アングリマーラ伝承を伝え続けたのである。『六度集経』と『賢愚経』の二点の経典の記憶だけに依存する口頭伝承と比べ、西域石窟では画像の提示が追加され、聞き手は頭を仰いで画像を見ながら説話を聞くことで、画像と音声結びつき、仏教物語の記憶と理解が容易になった。

備考 要旨は、日本語 4,000 字以内又は英語 1,500 ワード以内とする。